



今年の直木賞を受賞した「サラバ!」は、どこかの書評に、中高年がこの単行本上下巻700ページの長編を読みきるのはしんどいかもかもしれないと書いてあったが、私にしては珍しく、のめりこんで1週間ほどで読み終えてしまった。読みやすいのに軽過ぎず、ただ圧倒された。

僕(歩=あゆむ)と姉(貴子)、両親との家族の物語であり、青春物語である。歩は海外駐在員の父の赴任先のテヘランで生まれ、1歳半で帰国、再び小学校1年から5年までカイロで過ごし、帰国とともに両親が離婚、大阪の母の実家の近くに越してくる。

かなり風変わりな(アスペルガー症候群??)姉の言動(部屋に閉じこもって部屋中に巻貝の絵を描く、得体のしれない宗教もどきにハマる)に振り回され、歩はひたすら姉にかかわらないように、できるだけ気配を消して要領よくふるまう。美人の母は母で自分のしたいこと優先、仕事は真面目にしっかりできるが、どこか修行僧のような父。そんな家族の中であって、歩はいつもよい子で居続け、友だちと出会い別れ、大学生時代は絶好調でモチ期到来。そして、あることがきっかけでどん底まで落ちて引きこもる。あることというのが可笑しくも妙にリアルである。

特に子どもの心の描写は秀逸で、児童心理の教科書にできそうなくらい、わかりやすい。重くなりがちな家族の問題も会話が全て大阪弁なので深刻にならず、どこかよそ事めいている。僕、姉、父、母、の気持ちに少しずつ共感するものがあって胸にじんわりくる。

歩の幼稚園時代の子どものたちのやりとりも興味深い。友達同士でクレヨンの色交換とかの話を読んでいると、自分の保育園時代の出来事がふいに蘇って来たりする。大人の足では5分ほどの駅前商店街の小さなおもちゃ屋さん、1人でおはじきやリリアンを買いに

行ったときの心細さと大人になった感。地面に図を描いておはじきを飛ばし、字を彫って元の字を当てる遊び、雨の日は農作業のない母が傍らに居るうれしさ。

歩の父と母はなぜ別れたのか。その理由にも涙がにじんでくるような切なさがあり、家族以外の祖母や叔母、歩の友だちなど、多彩な人物が息苦しいほどの存在感で立ちあがってくる。誰にも理解されずほっておかれるだけの(ある意味、黙って見守ってもらってた?)孤独だった姉が再生して、母親とも認め合い、最後に歩に言う。

『私が信じるものは私が決めるわ。あなたも信じるものを見つけなさい。他の誰かと比べてはだめ…』

「サラバ!」は、日本語の「さらば」とアラビア語の「マッサラーマ(さようなら)」を掛けたもので、カイロでの親友と別れるときに歩とヤコブの2人が交わした言葉である。タイトルは「サラバ!」なのに、あらすじや舞台のエジプトのイメージから、私が勝手に「サハラ!」だと思い込んでいた(笑)

『子供にとって大切なものは食事から取る栄養だけではない。母や母に類するものや、やはり大人からの愛情である。愛情が足りないと、子供の心はほとんど死と同じ孤独を味わう』

思い起こせば、私は良き母親ではなかった。母となったあとも自分の楽しみ優先で、息子と娘を十分に愛しんでやらなかった。息子をおぶいながら、ひたすら文庫本を読んでいたり、娘が「もっと絵本読んで」と言っても、おぎなりに済ませた。娘の子育て中に失聴した私は自身の鬱屈もあり、育児に余裕がなく仕方なかったというのは言い訳である。それでも、ほったらかしにしていた割には、2人とも成人してのちは自立して生活しているので、こればかりは心底ホッとしている。

読み終えた後も、しばらく、あれやこれやと、自分の人生を振り返ってみる印象的な小説であった。

「サラバ!」 西加奈子 小学館